

主 題：互いに祈り合うこと

聖書箇所：ヤコブの手紙 5章13-18節

このような中（新型コロナウイルスの蔓延）ここでともに礼拝できること、また、ライブを見ておられる方もおられると思いますが、ともに礼拝をささげることができることを感謝しています。

テーマ：「互いに祈り合うことにおいて成長する」

今日のテキストはヤコブ5：13-18です。ヤコブはこのように記しています。

5:13 あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。喜んでいてる人がいますか。その人は賛美しなさい。

5:14 あなたがたのうちに病気の人がありますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。

5:15 信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。

5:16 ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。

5:17 エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。

5:18 そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を实らせました。

これまでの復習：

1. 互いに愛し合うこと Iヨハネ4：7-12
2. 互いに赦し合うこと マタイ18：21-35
3. 互いに正し合うこと ガラテヤ6：1-2
4. 互いに慰め合うこと IIコリント1：3-4

今朝、私たちがともに学びたいことは「互いに祈り合う」ということです。その前に皆さん思い出してください。先週、私たちは「互いに慰め合う」ということを聖書から見ました。私たちが想像できないほどの困難を数多く経験していたパウロ、余りの苦しさのゆえに「神さま、どうしてですか？」と疑問や不満を抱いてもおかしくないような、仕方がないような状況に彼はいました。しかし、そんな苦しみの中、彼が繰り返して口にしたことは「慰め」でした。彼はどんな状況に置かれていても喜びと平安を抱き、そして、いつも忠実に主に仕えることができたのです。

いったい、どうしてそのように生きることができたのか？どうして苦しみの中にあっても揺るがない信仰をもって歩むことができたのか？それはパウロが「慰めの源が神」であることをよく知っていたからでした。この世界の創造主である神が決して変わることはないあわれみの神であること、そして、この方がこの世界のどんなものも与えることが出来ない本当の慰め、本当の平安というものを、どんな状況にあっても必ず与えることができると、そのような確信をパウロは抱いていたからです。

慰めの源が神であると彼は知っていましたが、また、彼はそのことを知識として知っただけでなく、この神の慰めを日々経験しながら生きていたのです。神の慰めはどんな状況にあっても自分の心に働いて、自分を励まし力づけ奮い立たせ、そして、平安をもって歩いていくことを可能にすると言います。そんな慰めを彼は日々神からいただいて味わいながら生きていたのです。

そして最後に、パウロはただ自分が神からの慰めを受けて経験して終わりではありませんでした。彼は自分が味わっていたその神の慰めをもって、周りの兄弟姉妹を同じように慰めようとし続けたのです。苦しみの中にあってもどんなときも忠実に歩いていくそのための秘訣、それは慰めの源である神に目を向け、この方に信頼して歩み続けることであると、私たちは前回学んだのです。

さて、今日私たちが見ようとしている「ヤコブの手紙」は最初から最後まで「試練」というテーマが繰り返して記されています。そして、ヤコブは試練の中、苦しみの中にあつたクリスチャンたちが希望を持ち続けるため、平安を持ち続けるための方法をシンプルに「祈ること」だと記したのです。恐らく、皆さんも言うまでもなく、私たちのクリスチャン生活において苦しみの中にあつて祈ることが大切だということをご存じでしょう。でも同時に、祈ることに関して私たちがもつ問題は、どれだけ祈ることが大切だということを知っていることよりも、どれだけ実際に祈っているかということです。

チャールス・スポルジョンはこのように言っています。「もし、だれかがキリスト教の縮図とは？と

問うなら、私はひと言こう言おう『祈り』だと。」、兄弟姉妹の皆さん、自分の心に先ず問い掛けてみてください。私たちの日々の祈りの生活はいったいどのようなものかと。祈りが私たちクリスチャン生活の縮図となっているのでしょうか？もっと言えば、私たちは互いに祈り合うことを実践している者でしょうか？確かに、私たちはみな、祈りの生活において難しさを覚えます。もう一度、私たちの生活に必要な不可欠な「祈り」について、今日はともに「ヤコブの手紙」から考えていきましょう。

### ○どんなときに私たちは祈るのか？

ヤコブは13節から祈りについて「どんなときに私たちは祈るべきか」ということを教えています。

#### 1. 苦しみの中にあるとき祈りなさい 13 a 節

13節「あなたがたのうち苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。」と、このように命じています。ここで使われている「苦しんでいる」ということばは「病気で苦しんでいる」というよりも、もっと広い意味で様々な困難や問題を表すことばとして聖書の中で用いられています。たとえば、Ⅱテモテ2：9には「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。」とあります。ここの「苦しみを受け」が同じことばです。前回も見たように、パウロは福音のためにあらゆる苦難、困難を経験していました。けれども、ヤコブがこの手紙を宛てて書いた人々も同じように様々な困難や問題に直面していたのです。

そのことはこの手紙の最初にこのように記されていることから分かります。ヤコブ1：1-2「1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」と。ヤコブが手紙を宛てて書いた人々は信仰のゆえに迫害を受け故郷を追われ国外に散らされていたのです。そこにあって貧しさを覚え、富をもつ者から不当な扱いを受け、ときには死ぬほどの苦しみを体験することもあったのです。そのような困難な中に彼らは置かれていたのです。

そんな兄弟たちにヤコブが命じたことは「祈ること」でした。ヤコブは言いました。あなたがたはどうすることもできないような困難、苦しみの中にあるのですか？もしそうなら「祈りなさい」と。ヤコブもパウロと同じように、大変な苦しみの中にあるときにどこにその解決策があるのかをよく知っていました。ヤコブは本当の喜び、本当の平安、本当の慰めは主権者なる神からしか来ないとよく知っていたのです。だからこそ、苦しみの中にあるのなら、解決元である神に助けを求めなさいと言ったのです。

この神に自分の心を開いてすべてをゆだねて祈りながら生きていきなさいと、そのようにヤコブは命じたのです。私たちも同じことです。日々の生活にあって私たちは様々な苦しみ、様々な重圧を受けます。心が落ち込んだり悲しんだり、状況に打ちひしがれたり日々経験します。自分にはどうすることもできない苦しみの中にあるのであれば、ヤコブが言うことは「そんな状況さえも支配しておられる神にすべてをゆだねなさい」です。私たちはどんな状況にあって、自分の手に負えないようなことがあっても、それらを支配しておられる神に祈りなさい、あなたは祈ることができるのですと、そのように教えられているのです。

しかし、ヤコブは苦しみの中にあるときだけ祈りなさいと命じてはいません。

#### 2. 喜んでいるときの祈らなければいけない 13 b 節

13節の続きに「喜んでいる人がいますか。その人は賛美しなさい。」と書かれている通りです。ここで使われている「喜んでいる人」とは、人生に何の問題もなく幸せですべてがうまくいっている人のことや、いつも笑顔を浮かべている人のことではありません。むしろ、先ほどから見ているように、この手紙の読者たちは苦しみ、困難な中にいたのです。ここで言っている「喜んでいる人」とは、たとえ困難な中にあっても置かれた状況に左右されることなく、主のあわれみ、主の慰めを覚え、主にある喜びを抱いている人のことを表しているのです。私たちもよく知っている通り、聖書は繰り返して、私たちが置かれている状況によって私たちの喜びが左右されることはないと言っています。聖書が教える喜びは状況に左右されるものではなく、喜びの源である神により頼み、神に忠実であらうとする者に、神ご自身が与えてくださるものです。だからこそ、あれほどの苦しみに遭ったパウロが「いつも喜んでいなさい。私はどんな境遇にあって満ち足りることを学びました。」と大胆に言えたのです。ピリピ4：4「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」、4：11「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあって満ち足りることを学びました。」と。

パウロがもっていた喜びはパウロが置かれていた状況から来たものではありませんでした。彼が喜ぶことができたのは、神が彼に喜びを与えたからです。そして、私たちも同じように、私たちが日々の生活で味わうことができる喜び、多くの恵みや平安、慰めなど、感謝できることがたくさん神から与えられています。あわれみ深い神が私たちに恵みのギフトとして、日々私たちに必要なものを与え続けてくれています。そんな喜び、そんな真の満足を私たちが日々味わっているなら、その中で喜んでいるのであれば、その応答として「神に賛美を、神に感謝の祈りをささげなさい」とヤコブは命じたのです。

私たちは苦しみの中にいるときだけでなく、日々、神が与えてくださるその恵みに心から感謝しなければいけないのです。もし、私たちが苦しみにあっていないのであれば、そのことを心から感謝し、平安をもって歩んでいるなら、そのことを心から感謝しなさいということです。要するに、こういうことです。「クリスチャンの人生、それは良いときも悪いときも、喜びのときも悲しみのときも、いつも喜びをもって生きるべきものだ」ということです。私たちの祈り生活、それはいったいどのようなものでしょうか？パウロはテサロニケの人々に宛ててこのように言いました。Iテサロニケ5：17「絶えず祈りなさい。」と。また、エペソ6：18では「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。…」とこのように教えました。

パウロは「いつも、どんなときにも」と言ったのであって、自分の状況や感情に基づいて祈りなさいとは言いませんでした。ある人は「自分はいつも神に感謝をささげる祈りをしている」と言われるかもしれませんが、自分が苦しみの中にいるときはどうでしょうか？そのときに真っ先に神に祈りをささげ、神に助けを求めているのでしょうか？自分の置かれている状況に不平や不満を口にしたり、神に助けを求めるよりも、神以外のもの、この世の知恵やこの世の解決策などに自分の慰めを見出そうとしないのでしょうか？また、ある人は反対に「自分は苦しみの中にいるときこそ神に信頼して感謝して助けを見出そうと心から祈っている」と言われるかもしれません。

では、その苦しみから抜け出した後、私たちはこの神に心からの感謝をささげ続けているのでしょうか？私たちは苦しければ苦しいほど神により頼んだり、熱心に神に祈ったりします。問題は、同じ熱心さをもって神に感謝の、また、賛美の祈りをささげているかということです。私たちの神は私たちが必要なときだけ祈り、必要ないと私たちが感じるときは自分の生活から除いてもいいと、そんな神ではありません。マルチン・ルターはこのように言っています。「祈ることなしにクリスチャンであろうとすることは、息をせずに生きることよりもあり得ないことだ」と。私たちがクリスチャンとして歩むその歩みにあって、祈ることは絶対に必要なものだということです。私たちは良いときも悪いときもいつも祈りを賛美を神にささげることが大切なのだと、ヤコブはそのように教えたのです。

### 3. 病気の中にあるとき祈りなさい 14-15節

さて、苦しみの中にあるとき、また、喜びの中にあるとき、私たちの祈りが必要だと教えて来たヤコブは14節でこのように言います。「あなたがたのうちに病気の人がありますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。」と、病気の中にあるときにも祈りが必要だと教えます。皆さん、少し考えてみてください。これまでいつでもどんなときでも祈ることが必要だとヤコブは教えて来ましたが、では、いったい、ここで特に「病気のときに」祈ってもらう必要があると教えたのはなぜでしょうか？これまでヤコブは個人的な祈りの大切さについて教えて来たのに、どうして、ここでは「長老たちを招き」祈ってもらうことを命じたのでしょうか？そのことに関して、この箇所をよく知っている方々は想像がつくかもしれませんが、この箇所がややこしいゆえに多くの考え方があります。この14、15節は聖書的ではない間違った考え方の基になっている箇所でもあります。この箇所から聖書的ではない考え方が多くの人によって信じられているのです。

たとえば、繁栄の神学、繁栄の福音を教える人たちは、この箇所をとって「信仰さえあればどんな人でも、どんな病気でも癒される」と教えています。また、カトリック教会はこの箇所に基づいて、死の危機に瀕した信者に油を塗って力づけたり、その人の罪を取り除く「病者のための聖なる塗油」という儀式を行っています。言えることは、これらの考え方はこの箇所の正しい解釈ではないということです。では、いったい、ここが教える真理とは何でしょうか？もう一度14、15節を注意深く見てください。ここから六つのことばを一つずつ見ていきましょう。

#### a) あなたがたのうちに 14 a 節

14節はこのように始まっていました。「あなたがたのうちに…」とヤコブは言いました。言い換えれば、ヤコブが手紙を宛てた人たち、すなわち、「クリスチャンたちのうちに」ということです。このみことばが当てはまるのは、主イエス・キリストを自分の救い主、主と信じて歩んでいる者であって、どんな人の病気もいやされるとヤコブはここで教えているのではないということです。

#### b) 病気の人 14 b 節

次に「病気の人がありますか。」と「病気の人」ということばが使われています。これは肉体的な病気だけでなく霊的な弱さを覚えている人を表すことばです。特に、このことばは死の間際に追い込まれている人に対して使われていることが聖書から見ることができます。たとえば、エパフロデトという人物に関してパウロはピリピ2：27でこのように言っています。「ほんとうに、彼は死ぬほどの病気にかかりましたが、…」と。ですから、ここで「病気の人」とはクリスチャンの中で重大な病気に罹り死の間際にあって霊的にもがき苦しんでいる、そんな人を表しているのです。

#### c) 教会の長老たちを招き 14 c 節

この病気の人は普段苦しみの中にあるときのように自分で祈るのではなく、自分の教会の信仰において成熟した霊的なリーダーを呼んで祈ってもらわなければいけなかったということです。要するに、この人物は自分では祈ることが出来ないほどの危機的な状況に陥っていたということです。

#### d) 主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい 14 d 節

四つ目にこのように続きます。「オリーブ油」に関してもいろいろな考え方があります。ある人は、この当時、オリーブ油が医学的に病気の人を癒したことから、人を回復させる医療的な意味をもっていると考えています。しかし、もしそれがここでの意味なら、わざわざ長老を呼ばなくても医者を呼ぶことができたはずですが。また、油を塗ることがカトリック教会が信じているように、儀式的な意味をもっていると考えている人もいます。

しかし、私たちがこの文脈を見るときに、油を塗るという儀式がここでの中心でないことは明らかです。ここでは、油を塗ることよりも、主の御名によって長老に祈ってもらうこと、「祈り」が重要なのだと言えます。また、この行為がここで象徴的に用いられていると考えている人もいます。確かに、聖書には特別な働きのためにある人を選び聖める目的で油を注いでいたことを見ることができます。たとえば、出エジプト 28 : 41 には「これらをあなたの兄弟アロン、および彼とともにいるその子らに着せ、彼らに油をそそぎ、彼らを祭司職に任命し、彼らを聖別して祭司としてわたしに仕えさせよ。」と書かれています。これら以外でも、この「油を塗る」という行為には私が調べた限りでも 8 通りの解釈があります。このようにいろんな解釈があるのです。

では、いったいここではどのような意味をもっているのでしょうか？個人的には、このことばは象徴的な意味で用いられているのではないかを思います。この病気の人は死にそうな状態にあったのです。だからこそ、他の人よりも神に特別なケアをしてもらう必要があった。特別に長老に祈ってもらう必要があったのではないか、それが文脈に一番沿っているように思われます。ただ、ここで皆さんに覚えていただきたいことは、この箇所ですべて大切なことは油を注ぐ行為ではなく、主の御名によって長老たちがささげる祈りが中心だということです。なぜなら、病気の人を癒す力は油ではなく祈りの中に、そして、祈りを通して働く神の力にあるからです。「主の御名によって、」霊的リーダーがささげる祈りには大きな力があるということです。そのことをヤコブはここで教えるのです。

#### e) 信仰による祈り 15 a 節

五つ目にヤコブは「信仰による祈りは、」と言いました。ここに出て来る「信仰による祈り」とは、私たちが自分の願うことが叶うことを強く願うという、そんな祈りをささげることではありません。私たちが心の中で「それは絶対に叶えられる、必ずそれは実現する」と強く思いさえすれば、そのような強い気持ちを持てば病気が癒されたり、祈りが叶えられると、そんなことをヤコブは教えているわけではありません。別の箇所ですが、ヨハネはこのように言っています。Iヨハネ 5 : 14 「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。」、また、イエスもヨハネ 14 : 13 で「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」と言われました。

聖書が祈りに関して教えること、それは「神のみこころに適う願いをするなら…」 「主イエスの御名によって求めるのであれば…」 その願いを神は必ず聞き入れてくださるということです。言い換えれば、私たちが主のみことばに基づいて、主のみこころが成されること、主の栄光が現わされることだけを求めて祈るなら、神はそんな願いを、そんな祈りをご自分の計画に基づいて必ず成し遂げてくださるのです。そういうことをヤコブは教えているのです。

兄弟姉妹の皆さん、私たちが覚えなければいけないことは、私たちの最善を知っておられる神は必ず私たちの必要を満たしてくださるのであって、私たちの願いを満たしてくださるのではないということです。神は私たちに必要なものを満たして下さいますが、私たちが思う願うものを満たして下さるのではないのです。だからこそ、願っていたことがたとえ叶えられたとしても、叶えられなかったとしても、それこそが私たちにとっていつも最善であるということです。私たちは自分が考えることがベストだと思いますが、私たちの最善を知っておられ、私たちの心のすべてを知っておられる神が私たちに与えてくださるもの、それこそが最善なのです。

#### f) 病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。 15 b 節

ここで気付かれるでしょうが、「病む人」と「罪」の関係が述べられていますが、ポイントはこういことです。確かに、すべての病気が自分の罪によってもたらされることはありません。しかし、自分のうちにある悔い改めていない罪が、ときに死ぬほどの苦しみ、また、死さえもその人にもたらすことがあるということです。皆さん驚かれるかもしれませんが、神は罪を犯したクリスチャンを懲らしめるために、その人のいのちを取ることもあると教えています。そのことは I コリント 11 : 28 - 30 に

このように記されています。「:28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。:29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」と。もちろん、本当に救われている者がその救いを失うことはありません。しかし、神はこれだけ罪に対して厳しい懲らしめを与えることもあるということです。

聖い神の前にはどのような罪も軽くはないのです。神は教会の中の罪をいつも正しく重く扱われるということです。だからこそ、病気の人、特に、ここでは自分の罪のゆえに病気で死にかけている人にとって、霊的に成熟した長老に祈ってもらう必要があるのです。自分では祈ることが出来ないからです。危機的な状況にいたクリスチャンが苦しみの原因であるその罪が赦される時、その死ぬほどの苦しみも同時に癒されるのです。そんな力が「信仰による祈り」にはあるということをやコブは教えたのです。だからこそ、病気の中にあるときも私たちは祈りが必要なのです。

さて、これまで「どんなときに私たちは祈る必要があるのか？」ということを考えて来ました。残りの時間で「私たちはどのように祈るのか？」について考えてみましょう。

### ○どのようにして私たちは祈るのか？

そのことが16-18節に記されています。16節「ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働く、大きな力があります。」

#### 1. 互いに罪を言い表す

私たちは「互いに罪を告白し合う」、その必要があるとヤコブはここで命じました。しかし、私たちにとって互いの間で犯した罪を告白し合うということほど難しいことはないかもしれません。ドイツの神学者、ディートリヒ・ポーンヘファーはこのように罪の告白の難しさを記しています。「兄弟の面前での罪の告白は最も恥をかかせる類の行為です。その人に痛みを与え精神を打ちのめし、プライドを著しく傷つけるものです。罪人として兄弟の前に立つことは耐えがたいほどの屈辱です。」と。

皆さん、少し考えてみてください。いったいどうして聖書は私たちがお互いに罪を告白する必要があると教えたのでしょうか？もちろん、いろんなことが言えますが、一つ明白に言えることは、罪というのが私たちクリスチャンを神の家族から引き離し、孤独にするものだからです。皆さんもこのような経験をされたことはないでしょうか？自分のうちに相手に告白していない罪があるとき、相手との間に解決していない罪があるとき、その人から自然に距離を取ろうとしたことはないですか？また、自分のうちにある罪が周りに明らかにされることを恐れて、恥ずかしいと思って、周りとの距離を取ろうとしたことはないでしょうか？また、ときに、自分のうちに起こっている罪を正直に打ち明けずに、あいまいにして伝えてあたかも「自分は大丈夫ですよ」というマスクを着けて歩んだりしたことはないでしょうか？

私たちは「罪が人を孤独にする」ということをよく知っています。そして、私たちが孤独になればなるほどさらに罪の誘惑を受け更に罪を重ねてしまうことも良く知っています。自分は一人でも大丈夫です、自分は一人であってもそんな罪の誘惑には勝利できると、そのように思い込んだ次の瞬間に罪を犯してしまったという経験もあると思います。罪を犯し周りから自分は引き一人になった自分は、どんどん周りから自分を引き離し、自分がした間違いをどうにかして正当化して、自分のしたことを認めるのではなく、相手の悪いこと、あげくに神を責めるような状態になってしまう、そのような危険性を罪というものは持っているのです。

「互いに罪を言い表すこと」、それはこのような罪の誘惑から私たちを守ってくれるものです。だからこそ罪を言い表すことは、兄弟姉妹がこの場であって互いに神の家族として歩んでいくのであれば、必要不可欠なことだということです。私たちは互いの罪を言い表し互いの罪を告白し合って、そのときに赦し合っていくなら、私たちは神の家族として成長することができるのです。そのような重荷を私たちひとり一人は負っているということです。

先ほど読んだポーンヘファーのことばの続きにはこう記されています。「具体的な罪の告白にあって、古い自分はその痛みを恥ずかしさの中、兄弟の目の前で死に絶えるのです。」と。私たちがお互いに罪を告白し合うとき、確かに、私たちの心に痛みが伴うでしょう。しかし、そのときにこそ私たちはキリストに似た者として、キリストによって新しく生まれ変わった者として、変わり続けて成長し続けていくことができるのです。私たちの古い自分、私たちの罪は「そんなことはしなくてもいいよ」と私たちに言います。しかし、私たちが罪を告白して神の家族として成長していくのであれば、私たちはよりキリストに似た者になっていくことができる、よりキリストの栄光を現す者になっていくことができるのです。ですから、互いに罪を言い表すことは、私たちがクリスチャンとして歩んでいくのであれば絶対に欠かすことができないのだと、そのようにヤコブは教えるのです。

また、罪を告白することに関してそれぞれが覚えるべきことがあります。まず、罪を告白するのはだれでもない相手に対して罪を犯した者です。罪を告白するのは罪を犯した人だということです。マタイ

5 : 23 - 24に「:23 だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、:24 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」とあります。聖書が明確に教えることは、礼拝をするよりも罪を告白して相手と和解することが大切だということです。

私たちは罪を犯したとき「いや、相手が先に私にこんなことを言って来たから、相手が私に対して罪を犯したから」と考えてしまいます。確かに自分は罪を犯したけれど、相手がしたことの方がずっと酷いと、自分を正当化してしまうことを私たちはするのです。聖書が教えることは、あなたが罪を犯したのならあなたが先ずその人のところに行って、その罪を告白し、赦しを乞いなさいということです。また、罪を告白するということは、相手の罪を責めること、自分のしたことを否定することでもありません。「罪を言い表す」ということばは元々「同意する、同じことを言う」という意味を持っています。要するに、私たちが罪を告白するとき、私たちは素直に自分の罪を認め、そして、その赦しを求めるとことです。そのときに「あなたはこんなことをしたでしょう！」と相手を非難することはないのです。自分の罪を正直に告白しなさいということです。

「互いに罪を言い表すこと」はクリスチャンとして歩む上で大切なことです。

## 2. 互いのために祈り合いなさい

ヤコブは続いて「互いのために祈りなさい」と言いました。どのようにして私たちは祈るべきなのか？二つ目は「私たちは互いのために祈る」ということです。私たちは互いに罪を言い表すだけでなく相手のことを赦して、お互いが成長できるように祈り合っていくことが大切なのだということです。私たちはひとり一人罪人であるゆえに罪を犯します。でも、その罪を相手に告白して赦しを乞い、今度はその罪に陥らないようにお互いに祈り合って支え合って生きていくことができる、そのように私たちはしなければいけないということです。私たちはそのようにしてみれば忠実に従って、いつもキリストとともに主のみこころを求めて歩むのであれば、そんな私たちの祈りは大きなすばらしい影響をもたらすということです。そんな義人の祈りはその人を通して神が働くとき、罪を赦し病気を癒す。私たちには想像できないことを祈りを通して神が成し遂げてくださるのです。まさに、そのことが17、18節に記されているエリヤの祈りだったのです。

ここで一からエリヤがどういう人物であったかを見る時間は残念ながらありません。それぞれが時間のあるときにもう一度学んでみてください。エリヤはヤコブがここで記したように、私たちと同じように、ときに飢えを覚えたり悲しんだり、恐れを抱いたりしました。聖書を見るとこのエリヤはすばらしいこと、神に喜ばれるようなことをたくさんした人でしたが、彼も私たちと変わらない一面をもっており、そして、私たちと同じ罪人だったのです。

同時に、彼が祈るときはいつも熱心に祈り罪を告白し、そして、神のみこころが成されることを求め続けました。そんな祈りを彼がささげていたからこそ、5 : 17、18「:17 エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。:18 そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を实らせました。」とヤコブは記していますし、旧約聖書（列王記第一）にも記されているわけです。

5 : 16「義人の祈りは働くと、大きな力があります。」とある通り、神がその祈りを通して働かれるとき偉大な力を発揮することができるのです。同じように、私たちが先ず罪を告白して、そして、互いのために熱心に祈り、神のみこころが成されていくことを求め続けていくのであれば、そんな私たちの祈りを通して神が働いてくださるのです。私たちの想像もできないことを神は祈りを通して私たちに起こしてくださるのです。私たちにはそのような特権を今日与えられているのです。私たちの祈る祈りには大きな力があるということです。問題は、私たちが実際に日々の生活の中で互いに祈り合っているのか？ということです。私たちはこの祈りをどれだけ実践しているか？ということです。

今日、私たちは祈り合うことの大切さ、祈りがもたらす大きな力について、ヤコブのことばから見ました。もう一度、最初の質問を自分に問い掛けてみてください。「あなたの祈りはいったいどのようなものでしょうか？」「祈りの生活はいったいどのようなものでしょうか？」「それは聖書が求めているものでしょうか？」、そして、今日の「祈り合うこと」をもって、これまで5回に亘って見て来た「互いに～し合う」というシリーズは終わりです。互いに愛し合うこと、互いに赦し合うこと、互いに正し合うこと、互いに慰め合うこと、そして、互いに祈り合うこと、これまで見て来て皆さんも気付かれたと思いますが、これらは一一つつかけ離れたものでもバラバラのものでもありませんでした。

こんなどうしようもない私のために、自分では決して支払うことの出来ない罪の代価を神がイエス・キリストが十字架の上で犠牲として払ってくださった。私たちはイエス・キリストの犠牲によって罪が赦され、神の愛、神の恵みのゆえに、罪の奴隷から解放され神の家族として生きる特権が与えられたのです。愛し合うこと、赦し合うこと、正し合うこと、慰め合うこと、祈り合うこと、その基盤、そのエ

エネルギーになるのは、この偉大な福音の力だということです。だからこそ、私たちは神の家族として互いに愛し合うとき、神から受けたその愛をもって互いに愛し合い、私たちが互いに赦し合うとき、神が私たちを赦してくださったように赦し合い、私たちが慰め合うとき、神が慰めてくださったように慰め合い、私たちが正し合うとき、神が示してくださったその同じ柔和な心で正し合い、私たちが祈り合うとき、神が私たちをあわれんでくださったように互いに罪を言い表し、互いのために祈るのです。

私たちが自分の力でこれらのことを行いなさいとは言われていません。もしそうなら、ここにいるひとり一人、だれ一人としてこのような命令に従うことはできません。そんな力は私たちのうちには一切ないのです。しかし、私たちがイエス・キリストを信じて聖霊が与えられ、クリスチャンとして歩むことにおいて必要なものをすべて備えてくださっている神が、今も私たちとともにいて、そして、私たちが神の家族としてこの教会を建て上げる際の助けをしてくださるのです。

私たちがこれらのことを実践するためのキーは、イエス・キリストの愛とその十字架だということです。ですから、もしこの中にイエス・キリストのすばらしい十字架の力を知らない方がおられるなら、まだ自分の罪の中にいてこのすばらしいイエス・キリストの赦しを救いを受け入れていない方がおられるなら、今日、イエス・キリストを自分の救い主、また、主と信じて歩んでください。

兄弟姉妹の皆さん、私たちはキリストをかしらとする神の家族の一員に招き入れられました。私たちの責任は、互いに愛し合い、互いに赦し合い、互いに正し合い、互いに慰め合い、そして、互いに祈り合うことです。そのことを通して、私たちはキリストのからだを建て上げ、この地において栄光を現すことができます。ですから、どうか、互いに仕え合いながら、神の栄光を求めて今日を生きていきましょう。